



Book Review

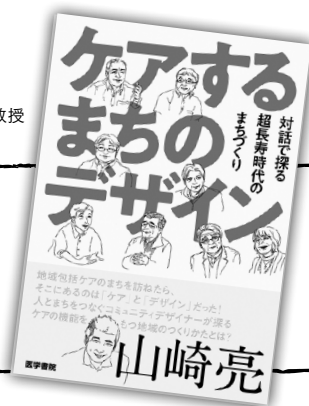
評者:西村ユミ 首都大学東京健康福祉学部看護学科教授

ケアするまちのデザイン

対話で探る超長寿時代のまちづくり

著:山崎亮/定価:本体2000円+税

発行:医学書院/TEL:03-3817-5657



「ケアを提供する」から「まちがケアする」へ

医療者にとって「地域包括ケアシステム」は耳になじんだ言葉である。厚生労働省によれば、可能な限り住み慣れた地域で、自分らしい暮らしを人生の最期まで続けることをめざした、地域の包括的な支援サービス提供体制のことだ。“コミュニティデザイン”を仕事とする山崎氏はこの言葉に出会い、「医療や福祉の世界がまちづくりに近づいてきた」と思ったという。しかし、それはどのようなケアであるのか？この疑問をもって、自身がイメージする地域包括ケアに近い取り組みを行っている地域に出向き、鼎談を試みた。本書はその生の記録である。

なぜ“鼎談”であるのか。著者がイメージしたのは、ケアとデザインとが協働する現場である。だから対談は、各地域において医療や福祉の専門家とデザインやまちづくりに携わる人、そして著者の3名で行われたのだ。

新潟県のある地域では、郊外の大規模特別養護老人ホーム(特養)が解体され、まち全体を「ケアのある暮らしの場」としたプロジェクトについて語り合った。かつての施設長の「施設をつくるのか、家をつくるのか」という問いが生んだプロジェクトである。滋賀県のプロジェクトでは、住民たちの「魅知普請の創寄り」が下支えとなり、チーム永源寺が地域をまるごとケアする。そこでは、「人たらし」という人間力が多様な人々をつないでいく。埼玉県では、まちづくりに

関わる住民を「コミュニティデザイナー」と呼び、在宅医療連携拠点「菜のはな」に支えられ「ケアする社会」をつくる。ケアを提供する側と受ける側に分けず、相互の信頼関係を築くことで、住むだけで「ケアされるまち」になった。石川県は、生活上の困難を抱えるすべての人を対象にした「三草二木 西園寺」という多世代交流拠点をモデルに、一から「Share金沢」というまちをつくった。

いずれも時間をかけて生み出したユニークな取り組みだ。著者は、最初は聞いているだけで精一杯だったというが、次第に自分たちの取り組みとの関連に気づく。だから中盤になると、興奮して話し過ぎてしまう。それだけではない。ケアとデザインの関係、ケアとデザインが融合していた時代、生活における貨幣と信頼のバランスを考えさせられ、最後の章「ケアとデザインの再会と深化」でこれらを議論する。

贅沢である。まちづくりにケアとデザインが組み込まれた現場において、それをつくってきた者たちと対話し、そこでの気づきが議論され深化する。本書を読むことは、この対話と議論に触れることであり、同時に問われ鍛えられるのは、自身のデザインセンスである。私は、本書から“まちがケアする”という発想を得た。もはや地域包括ケアに「提供」という文字はいらない。看護の枠組みもひっくり返す必要がありそうだ。